文　法（史的研究―古代）

山口堯二

与えられた時代は鎌倉時代までである。文体論的研究も、文法上注意すべき特定の語の使用状況を中心にしたものは取り上げることにする。

一、文法一般

まず新書版ということもあって一般読者への影響抜群と推察する大野晋『日本語の文法を考える』（岩波書店、昭53・7）が出た。これは講演の記録に手を入れたものという。末尾に付された「動詞活用の起源」は、服部四郎・大野晋・阪倉篤義・松村明編『日本の言語学第四巻　文法Ⅱ』（大修館書店、昭54・7）に再録され、その「解説」に服部四郎氏の批判的見解「大野晋『動詞活用の起源』について」が添えられている。

比較研究の立場からは、村山七郎『日本語の誕生』（筑摩書房、昭54・3）が出た。そこにも「日本語動詞をめぐる諸問題」の章があり、たとえば四段活用動詞にも母音ステムの語例を認める推定意見が出ている。

大野透『日本語の溯源的研究』（高山本店、昭53・6）には個々の助詞・助動詞にふれた部分が多い。記述は概説的ながら、既刊の辞書などへの手きびしい評言がめだつ。

桑田明『日本文法探究下』（風間書房、昭53・1）は上巻刊行後六年を経過して完結。古語・古文解釈を原典に忠実に行うねらいといい、「第五編文章趣致　文学と文法との間――文章美の国語学的探究」といったものをふくむ。

浅野信『日本文法発想論』（桜楓社、昭53・11）は「宣長の先鞭する―他者主体発想の文法相の二点∧(1)他者（が）我に逢ふ(2)妹（が我が）心に乗る∨に意を発して、その意を能うかぎりの分野において」探ったという、その発想に特色を見る。

作品単位の語法書には、岩井良雄『宇津保物語語法考』（笠間書院、昭54・9）、同『今昔物語集語法考』（笠間書院、昭53・9）、同『流布本平家物語語法考』（笠間書院、昭53・1）があった。いずれも品詞別等により用例の出現傾向などを概説する。具体的な用例の点検にも便宜を与えるであろう。

木村紀子「意味と言語形式――日本語の『もとのこころ』を――」（『国語国文』47―11、昭54・11、同48―8、昭54・8）は、古代語の基礎語から文法的形式に托された本来の意味のありようを探っている。未完。

二、用言・活用

活用については注目したい単行本が出た。川端善明『活用の研究Ⅰ』（大修館書店、昭53・3）『活用の研究Ⅱ』（同、昭54・2）は、上代語のいわゆる母音交代と活用とを一貫した意味重視の立場で解釈検討する意欲的な論考である。Ⅰの「第一部　前活用としての母音交代」は語形分化の前提となる「形状言」の存在を直観することによって捉えた母音交代の構造解釈。つづくⅡ「第二部　活用の構造」は文の領域における現象としての体・用・相にわたる品詞性とその成立に関する詳論である。氏独自の用語もいろいろ駆使され、充実した論述が個性的である。

島田昌彦『国語における自動詞と他動詞』（明治書院、昭54・4）は江戸時代以来の自他に関する研究史に力点をおいたものであるが、古代語におけるその問題を考えるにも、今後欠かせぬ参考文献になる。

小山敦子「同根派生動詞の造語法則――自発態の諸動詞――」（『中田祝夫博士功績記念国語学論集』、勉誠社、昭54・2―以下『中田記念論集』と略称する）は、造語法則によって動詞の性能を類型的に分類する試みという。

内田賢徳「『あり』を前項とする複合動詞の構成」（『萬葉』101、昭54・7）は述語の構造分析による語構成の論で、主として助動詞「つ」「ぬ」の承接、述語としての動作態様の面から複合動詞「あり――」に共通する意味構造を論じる。解釈的立場で与えられていた従来の「接頭語」説への批判はもっともである。

中村幸弘「補助動詞『あり』小論」（『田邊博士古稀記念国語助詞助動詞論叢』、桜楓社、昭54・8―以下『田辺記念論叢』と略称する）は、補助動詞「あり」の認められる構文の種々相にふれる。

形容詞については具体的な使用傾向に関するものがめだった。西尾光雄「源氏物語の形容詞について」（『東京女子大学日本文学』51、昭54・2）は、意味と使用傾向との相関を探って、客観的属性的なものは連体修飾、主観的心情的なものは述部的用法がそれぞれめだつと、具体例を挙げて指摘する。

進藤義治「源氏物語の形容詞の連用形の機能について」（『南山国文論集』3、昭53・12）は、一一語を選んでその中止法・副詞的修飾などの用法別割合を調べ、近代の芥川龍之介作品の傾向と対照させる。

小島俊夫「『あやし』・『あはれなり』の副詞法と中止法」（『解釈』24・2、昭53・2）も使用傾向に関連するが、氏のアプローチは表現解釈に密着している。

形容詞には音便や語音構造に関するものもめだった。甲斐睦朗「青表紙本源氏物語における形容詞連用形のウ音便について――その表現への志向――」（『国語国文』47―8、昭53・8）は、伝本との関係を細かく検討し、「構文上の用法」とウ音便率との関係を調べて、その間に少なからぬ相関を認めている。

岡崎和夫「訓点資料における形容詞のイ音便」（『国語と国文学』56―10、昭54・10）はコトなどの形式名詞を読み添えるときにイ音便が多く、その場合の音便化率が平仮名文資料のそれよりはるかに高いといい、訓点資料のほうが日常口頭語におけるその進みぐあいを反映していると見ている。

形容詞の語音構造に関しては、北原保雄「形容詞の語音構造」

（前掲『中田記念論集』）、工藤力男「中世形容詞の終焉」（『論集日本文学・日本語3　中世』角川書店、昭53・6）があった。ただし、北原論文が「――しし」型形容詞の成立にふれる点を除いて、ともに文法以前の問題であろう。

語の活用についての変遷を取り上げたものに、小久保崇明「『かやうなり』の活用について」（『解釈』24―4、昭53・4）があった。中古には形容動詞の形態を整えていたが、中世に入ると「かやうに」「かやうの」の形に用例が限られていく傾向がその用例数で示されている。

増淵恒吉「源氏物語の和歌における連体修飾」（『専修国文』22、昭53・1）は氏の立てた用言（助動詞）による連体修飾の類型を源氏の和歌に適用したもの。

三、助動詞

松尾捨治郎『万葉集語法研究助動詞篇』（笠間書院、昭53・7）は成稿後三〇余年を経ての刊行。この書についてはすでに本誌第一一九集に浅見徹氏の紹介が出ている。

近年のように研究文献が多くては真に必要な情報を選別するのも容易ではない。そういう中で、梅原恭則編『論集日本語研究7　助動詞』（有精堂、昭54・2）が明治以降の助動詞関係の論文一九篇（うち古語関係九篇）を選択収録し、要を得た解説展望が付されたのはありがたい。

伊藤慎吾『源氏物語の助動詞完了態用例の新研究(上)』（風間書房、昭53・10）は、上接語・下接語別にツ・ヌ・タリの使い分けを用例から帰納することに専念したもののようである。

近代西欧語との対照から、日本語では従来客観的な事物などを受身の主語に立てることは少なかったとよくいわれる。しかし、その言い方にはどこか曖昧な点があり、古代語の受身の表現もその実態や範囲はいま一つ明確ではなかった。小杉商一「非情の受身について」（前掲『田辺記念論叢』）はその点について非情のものを主語とする中古作品の受身の例を調べ、「純然たる非情の受身の表現」は動作性が稀薄で「その結果として在る状態を専ら表現するために『たり』・『り』またはそれに準ずる『あり』・『侍り』・『無し』等々の表現を必ず伴う」という。

中西宇一「自発と可能――「る」「らる」の場合――」（『女子大国文』83、昭53・6）は具体例の意味分析によって、自発はつねに心情に導かれて生じるが、可能はもっぱら状況に導かれ、不可能だけが心情・状況いずれの場合にも対応すると説く。

岡崎和夫「平安時代の漢文訓読に受け継がれた『シム』――接続に関する破格例とその特質――」（『国語学』116、昭54・3）は、シムの接続面に他動詞的表現を要求する文脈にひかれて自動詞であるべきところを他動詞に誤り、二重の他動詞的表現にした破格例の出現傾向を指摘する。

いわゆる時の助動詞に関しては「き」「けり」の使用状況をめぐっての文体論的研究がめだった。吉岡曠「竹取物語から源氏物語へ――「き」「けり」の用法を中心として――」（『国語国文論集』7、昭53・3）は、用法の種類をかなり具体的な観点から分類して、竹取と源氏の傾向を比較し、源氏の地の文における用法の種類の多彩さなどから源氏の語り手は物語世界の内側に移動しているという解釈を物語の方法にむすびつける。作品によって地の文の性格にも大きい差があ

るという指摘からいえば、語の用法を調べるにも会話文・地の文などの区別だけでもっぱら量的に導かれた調査結果に頼るようなことは今後慎重にしなければならないだろう。

辻田昌三「物語る『けり』」(『島大国文』8、昭54)は、初期仮名文の作品における回想的な「けり」の多寡を主体の時間認識、対話的と叙述的という性格の違いなどの観点から考えている。

大坪併治・野田美津子「説話の叙述形式として見た助動詞キ・ケリ――今昔物語を中心に――」(『大谷女子大国文』8、昭53・3)は、説話の叙述形式は初めと終わりの表現が基調をなすと考えた手際のよい調査によって今昔の叙述形式はケリが基調といい、成立時期の近い他の説話集の傾向にもふれる。

国田百合子「助動詞『し』の未然形試論」(前掲『田辺記念論叢』)は記紀歌謡に過去の「き」の連体形「し」と並行して「存在」「完了」の「し」があったといい、「人にありせば」などの「せ」を後者の未然形と見ている。「完了の助動詞『し』」の性格をもう少しはっきりさせることはできないであろうか。

助動詞の意味の分類というのは厄介である。ある観点から筋を通すと、どこかにまた無理や曖昧さが生じがちである。堀口和吉「助動詞の意味――〝べし〟をめぐって――」(『山辺道』23、昭54・3)は、従来の説への批判から上接語の動詞を(1)自然の動きと捉えた場合、(2)意志的な動きと捉えた場合、(3)当為の動きと捉えた場合という観点で「べし」の意味を分類し、終止用法に限って(1)に「推量」、(3)に「命令」「決意」が添うと説いている。推量などを終止用法だけに限定して考えると、たとえば「死ぬべく思ほゆ」などの意味が終止用法に置き換えて理解されている常識に抵触するという問題が生じる。「べし」については、ほかに橋本研一「『べし』における可能の意味――『可能』の意味史序説――」(前掲『田辺記念論叢』)というのもあった。

滋野雅民「今昔物語集に見られる『コソ有ヌレ』について」(前掲『中田記念論集』)は「有リ」に下接するツ・ヌにどういう活用形の例があるかを調べ、「コソ有メレ」の誤写であることを指摘したもので、語法研究による本文批判の一例になる。

遠藤和夫「助動詞『らむ』の口語性」(前掲『田辺記念論叢』)は平安中期までの「らむ」を日常生活で普通に用いられた口頭語であったと見る位相論である。

此島正年「『とはずがたり』の語法――助動詞・助詞を中心として――」(前掲『田辺記念論叢』)は一四世紀初めに成ると思われるその作品に残存する古代語法と新しい語法についての指摘紹介。ちなみに、同作品の位相については、木村紀子「中世の女房語――『とはずがたり』の言語位相――」(『叙説』、昭54・10)が詳しい。

なお、アクセントの面から助動詞にふれたものに、岩手勇二「声点資料による助動詞の性格について」(前掲『田辺記念論叢』)があった。鎌倉期のアクセント資料による。

四、助　詞

上野尚美「道の知らなく――助詞『の』『が』の特殊な場合――」(『古典と民俗』8、昭54・4)は、喚体句や従属句の中の「の」「が」に格関係から見れば主格以外の「を」格「に」格に相当するものもあることを万葉・源氏の例で示し、言い切り文における「は」に相当

するという。一部論述に腑に落ちない個所があるけれども、佐伯梅友氏の指摘を一般化させた好論と見てよい。

阿部八郎「『今昔物語集』本朝仏法部の主格助詞」（前掲『田辺記念論叢』）は発言行為の表現にあらわれる主格助詞と待遇・引用形式の関係についての調査報告。

木之下正雄「同格助詞の『の』について」（『鹿児島女子短期大学紀要』14、昭54）は「絵などのをかしき」のように属性を後置して上の事物を限定する言い方と、「友だちの久しくまうでこざりけるもとに」のように「同格体言句」が別の体言に係る構文の種々相にふれる。

山口康子「『に』を介する同一動詞反復形式の表現価値――その通史的考察の試み――」（『春日和男教授退官記念語文論叢』、桜楓社、昭53・11―以下『春日記念論叢』と略称する）は、その使用場面、使用動詞の限定されていることなどから表現価値を抽出する。この形式に対する氏の執着ぶりがうかがえる。

鎌田良二「助詞『を』について」（前掲『田辺記念論叢』）は格・接続などにまたがる「を」の「本質」を「ニ対シテ」の意と見ている。いわゆる格助詞・接続助詞を統一的に捉える見解ははやく松下大三郎氏に見られた。口語への言い換え操作には、用いられる口語の多義性に加えて適用の恣意性も介入しやすいという方法上の難点があり指摘が事柄の一面に終わりがちであるように思う。

山口堯二「『を』の接続表現の諸相」（『語文』34、昭53・6）、同「『に』の接続表現」（『大阪大学教養部研究集録』27、昭54・2）は、他の接続形式との関連にふれながら、その形式の基本的な意味関係と両立して認められる現実的な意味関係の広がりを確め、それぞれの形式の表現性を論じる。同「ク語法と接続表現――『ク語法＋に』の表現性――」（『国語と国文学』56・8、昭54・8）も同様の方法でク語法の一面を検討している。

浅野信「『ば』、『て』の承接する上下主体の異同」（前掲『田辺記念論叢』）は、結ばれる両句の主体の異同という観点から已然形承接の「ば」と、「て」の違いにふれる。「ば」は主体の異なることが多く、「て」は同一のことが多いのはわかるが、それを上接用言の活用形の形式的意義によるとされるのはいかがであろう。

鎌田広夫「『平家物語』に見えるいはゆる逆接の『ねば』について」（前掲『田辺記念論叢』）は諸本における該当箇所の異同調査から「ねば」の言い換えには「ぬに」のほか「ぬ所に（へ）」「ぬうちに」などの言い方が用いられる傾向もあったと指摘する。順接か逆接かという二者択一の議論より、「ねば」が中世においてどう理解されていたかを考えさせる材料の蒐集提示が私にはありがたい。

宮地幸一「ずは・なくは考㈠」（『帝京大学文学部紀要』10、昭53・10）は、意味と助詞相互の重なり方との相違から、「未然形＋は（接続助詞）」と「連用形＋は（係助詞）」は区別すべきだという見解に立って用例を蒐集整理する。

小林賢次「中世の仮定表現に関する一考察――ナラバの発達をめぐって――」（前掲『中田記念論集』）は、形態に即した調査に基づく。ナラバ形式の多用されていく様相を上接語別に細かく調べている。

近藤泰弘「構文上より見た係助詞『なむ』――『なむ』と『ぞ―や』との比較――」（『国語と国文学』56―12、昭54・12）は「なむ」と「ぞ―や」がともに和歌に出現しないことなどから、「なむ」には卓立とあいまって「ぞ―や」の「や」にあたる聞手への強い呼びかけ機

能がふくまれると見る。ここで特に示したかったのはその方法論であるといい、それを納得させてくれる好論である。「構文上の規則に分析する」方法でより客観的に検証できる面があれば、結論が既知の範囲にとどまるにしても試みる価値は高い。

大木正義「間投助詞『や』小考」(『解釈』25―9、昭54・9)は、中古・中世の諸作品における「や」の文末用法の出現状況から各作品がどの程度会話のことばに近いかなどを文章史的に眺めている。

関谷浩「副助詞『など』は例示の意なりや」(前掲『田辺記念論叢』)は「集合」概念を用いて「など」は「例示というよりも、複数の概念を背後に持ちながら、その中から一つ以上を特示強調する意が中心」「だからこそ、それ以外のことがぼかされ、朧化・婉曲の意も出る」という。指摘が明快である。

堀川昇「『さへ』『すら』『だに』について」(『稿』2、昭54・3)は、主体の現実に対する「期待」(広義にいう)との関係から三語の意味を表現論的に取り上げている。氏の興味はもっぱら三語の使用における主体の意識に向けられているが、「『さへ』も『すら』も「期待」と現実との間のギャップに対する異和感が基礎にある言葉」というように、構文上の特色を離れて一般化を急ぐと、事柄の一面を拡大しすぎるおそれもあろう。

小倉肇「助詞『がに』の史的変遷――『がね』『べく』との交渉をめぐって――」(前掲『田辺記念論叢』)は、中古以降の「がに」に焦点をあてて「がね」との交渉における成立を論じ、折口信夫の見解をふまえて「べく」との交渉・交替をかなり具体的に示す。

徳田政信「万葉『馬莫疾打莫行』考――異例の係結の再検討――」(前掲『田辺記念論叢』)は、一部の誤写説を排して二重係結の構造を検討したもの。その中で禁止の形式三種の成立過程についても見解が述べられている。禁止の形式の成立については、山口佳紀「古代禁止表現形式の成立」(『国語国文』47―2、昭53・2)がそれを正面から取り上げた。禁止表現に先行してこれを予告する陳述副詞「な」が終止形につくのは、終止形に「かつて名詞法があった」からであり、「な」が文末に来る形式は後続する禁止表現の「省略」によって成立したと説く。パロール的な後続成分の省略が文法的な形式の成立につながるとは限らないから、形式成立の推定には「省略」を考えるにしてもその一般化を説明するに足る積極的な根拠の提示が必要ではないだろうか。

佐田智明「平安朝における終助詞『かし』について」(前掲『春日記念論叢』)は、上接語の種類調査による検討で「よ」「な」「かな」のそれとの対比を試みたもの。表現価値についてはなお「その用いられる場面……文脈にわたる吟味が必要である」との付言があった。

五、副用語その他

田辺正男「源氏物語の感動詞――「いさ」系と「よし」系と――」(『国学院雑誌』80―3、昭54・3)は「いさ・いさや」「よし・よしよし」などの用例を検討し、『源氏物語大成』の索引では副詞の中に収めているが感動詞と見るべきであろうとする。

堀口和吉「『その愛しきを外に立てめやも』考」(『山辺道』22、昭53・3)は、指示語について現場指示と観念指示の用法を区別し、コソアの領域の認定は常に話し手の対象に対する親疎を根本とする関わりの気持に基づいてなされるという。

中西宇一「副詞『おのづから』の自発性」（前掲『中田記念論集』）は、源氏物語の「おのづから」に認められる自発性にどういう場合があるかを具体例をあげて分類し、その広がりを確めている。氏の関心は助動詞「る・らる」におけるそれとの対照に根ざす。

井上博嗣「比較表現と古代語におけるその展開について」（『論集日本文学・日本語1　上代』、角川書店、昭53・3）は、形容詞の相対的意味・「まさりて」・「けに」による上代・中古の比較の表現を、相関する助詞「に」「より」の違いとからめた考察。同「程度副詞の『程度』について――上代の、助詞『まで』と高度の程度を示す副詞より――」（『女子大国文』83、昭53・6）は、「程度」の意味を段階的に捉えることによって程度副詞が担う意味の位置づけを考えている。

山口堯二「『ことめでば』『ことならば』考――コト（事）の暗示性――」（前掲『論集日本文学・日本語1　上代』）は、和歌におけるそれらの条件句の表現性を論じ、「こと」を単に「同じ」の意と見た橋本進吉説による理解の不備をただそうとする。

橋本四郎「ク語法とその周辺」（前掲『論集日本文学・日本語1　上代』）は、句的内容の体言化という側面からク語法を取りあげ、その類型化に伴って用言連体形による準体句構成が多くなっていくという見方を、より総合的な構文からより分析的な方向へという国語史の流れに位置づける。

西宮一民「いわゆる甚（な）し』について」（前掲『論集日本文学・日本語1　上代』）は、一見否定の意がないようにみえる「あらけなし」「いはけなし」などの「なし」も、心情的に事柄の程度を否定する意味をもつもので、非存在・内容否定などの形容詞「なし」と別語ではないと見たもの。

蜂矢真郷「一部重複と縮重複」（前掲『論集日本文学・日本語1　上代』）は「形状言」の重複に末尾の音節のみ重複する一部重複（ユララなど）と、重複の縮約（イトドなど）を区別し、ともに前後の両項が対等ではないことのあらわれと見る。同氏には、ツグ・ツヅク・ツル・ツヅル・タル・ツム・トムなどの語群に意義的な関連性を探った「動詞ツクをめぐる語群」（『親和国文』12、昭53・1）もあった。

関一雄「接頭語『あひ（相）』の一考察――中古和文の用例を訓点資料の用例と比較して――」（前掲『中田記念論集』）は、漢文訓読からまず男性会話語に入って複数表現から遠ざかり、源氏の頃に丁寧語的性格を帯びるものや地の文の用語になるものがあらわれるという位相論。同氏には、ほかに「『なまにくし』から『こにくらしい』へ」（『山口国文』2、昭54・2）という変遷を取り上げたものもあった。

工藤博子「万葉集巻十四の語彙・語法における平安時代的性格について」（前掲『春日記念論叢』）は東歌の「めり」「がに」など二件の語彙語法をめぐり、それらが中央で確立した平安時代に入って後に巻十四に増補があったのではないかという仮説を提出する。たしかに国語史上注意をひく現象の多い巻ではある。

岡崎正継「接続助詞『とん』『どん』について――鎌倉時代東国資料における――」（前掲『田辺記念論叢』）は、「とも」「ども」の転訛形が東国資料に見られるという。春日正三「日蓮聖人ご遺文の国語学的研究――音声言語資料としてのトン・ドン」（『立正大学文学部論叢』63、昭54・2）は未見であるが同様の問題を扱ったものらしい。東国資料

については多角的な検討を望む。

六、待遇法

敬語については作品ごとに用法・相対的敬度などを分析する着実な研究が進んでいる。文体論的な志向も顕著に認められ、作品成立論などの有力な手がかりにも利用されている。

和田利政「敬語の分類と敬語補助動詞」（前掲『田辺記念論叢』）は古代語ないしは古典語における用法を基礎に、敬語補助動詞に視点を置く敬語分類基準について自身の見解をまとめている。

榊原邦彦「源氏物語の尊敬語の特殊用法」（『豊田工業高等専門学校研究紀要』11、昭53・11）は、「せ（させ）給ふ」を尊敬語動詞に添えた例を調べたもの。森昇一「『す』『さす』重複の表現」（前掲『田辺記念論叢』）は、最高敬語「せ（させ）給ふ」の定着に伴う使役表現との重用傾向にふれる。

大久保一男「鎌倉時代の説話集における敬語『る・らる』」（前掲『田辺記念論叢』）は、四説話集（宇治拾遺・発心集・古今著聞集・沙石集）の地の文における「一般尊敬」を自身の立場で規定しなおし、その用法に前代とくらべたより高位層への伸張や女性の使用例が依然少ないことなどの特徴をまとめている。「る・らる」をめぐる敬語関係では、このほか黒沢幸子「尊敬助動詞『る・らる』の用法――『古今著聞集』を中心として――」（『文学論藻』53、昭53・12）が（一般尊敬）用法について記録体の「被」との関係などを考え、石井幸子「尊敬助動詞『る・らる』の一用法――最高級位者を動作主とする場合――」（『解釈』25―9、昭54・9）では、いわゆる「公尊敬」のほとんどが動作主を問題としない用法であると、その待遇性を疑問視している。待遇表現という視点だけで見ることには確かに問題があろう。

杉崎一雄「格助詞『に』による動作主尊敬表現」（前掲『田辺記念論叢』）は、場所を示すことによって間接的にその動作主を表わす用法の中古和文における実態に探りを入れたもの。助詞に関する待遇性については、このほか、福田益和「古今著聞集の研究――助詞『の』・『が』の用法――（上・中・下）」（『長崎大学教養部紀要』18 19 20、昭53、昭54）が上接語を個有名詞・普通名詞・位階等の別によって細説している。位階別では四位の官人に編著者成季の意識のゆれがあるという。

渡辺英二「光源氏の待遇表現――源氏物語玉鬘系地の文の尊敬表現――」（『国語国文研究』59、昭53・2）は、第一部紫上系・玉鬘系の別による比較から、玉鬘系の巻にのみ中将時代から「せ（させ）給ふ」「おはします」の使用が認められるという。作品成立過程ないし構想論とのかかわりを調べるという着眼はおもしろい。が、位階官職別用例の量的比較が玉鬘系後期挿入の可能性まで云々できるほどの手がかりになるのだろうか。

東辻保和「説話の待遇表現――打聞集と今昔物語集との関連をとおして――」（『鎌倉時代語研究』2、昭54・3）は、両書の類似説話のいくつかにおける主要人物の待遇表現を対比して語り手による差を見出す。

川岸敬子「保元・平治物語における『――奉る』『――参らす』『――申す』」（『国語学・研究と資料』3、昭53・6）は、待遇価値・上接動詞・位相・場面などの観点から多角的に細かい対比を試み、既発表の平家のものとほぼ共通の傾向を認める。同「『太平記』における『――奉ル』『――参ラス』『――申ス』」（『国語学』117、

昭54・6）も同様の調査考察を太平記に試みたもの。

下坂勝洋「『発心集』の『聞こゆ』の諸相」（『説話』6、昭53・5）は、受手が地の文で尊敬語の対象になっているかを敬語性判定の基準として「聞こゆ」の常語（雅語）への移行傾向を認める。

石井文夫「四段活用をする謙譲の助動詞『たまふ』をめぐって――『足利本仮名書き法華経』にみられる一つの語法――」（前掲『中田記念論集』）は「かくのこときことを、われ、きゝたまふりき」等を謙譲と見ている。

重見一行「後撰和歌集詞書における『侍り』多用に関する試論」（『国語と国文学』56―10、昭54・10）は、その「侍り」使用を褻の歌の集成としての詞書の性格が必然的にもたらした自然なる多用と解釈し、敬語意識を越えた撰者の文体感覚・心情にも迫る。

白川洋子「『宇治拾遺物語』における『侍り』と『候ふ』の一考察」（『香川大学国文研究』3、昭53・9）は「侍り」専用、「候ふ」専用、混用の別に説話内容の実在年代（世紀別）との相関を調べ、両語の使用がその実在年代とほぼ歩調をあわせて展開する傾向を見出す。宮内健治「とはずがたりの丁寧語『侍り』と『候ふ』」（『解釈』25―4、昭54・4）は、両語の使用状況をいろいろの角度から調査したもの。鎌倉期の「侍り」多用作品として注意されるだけに文体論的研究も今後の課題になるであろう。若林俊英「『沙石集』の会話文における『侍り』と『候ふ』」（『湘南文学』12、昭53・3）は、未見。

なお、北原保雄編『論集日本語研究9　敬語』（有精堂、昭53・11）は現代語関係の論文を中心に再録するが、敬語の実態分析を支える理論の深化のために一つの情報センターになることをめざす。

これで拙い展望を終わる。紙数の都合で割愛したものも多いが、それ以上に大事なものの見落しも多いことであろう。不明・不手際の段、どうかご寛恕のほどを。

――大阪大学助教授――